

いえる方法論へのこだわりが、本書の大きな特質である。無論、

その分、叙述には慎重さと表裏の関係にある逡巡もあって、分かりにくい部分もある。闇斎学派から垂加派への転回をどのように考えたらよいのか、なぜ近代ナショナリズムの主張が闇斎学派の枠組みを「内容」としたのか、著者のいう「乱反射する時間」の中にテクストを置くことは、歴史意識の問題としてはどうのような位相にあるものなのか、「研究の視角」として朝鮮儒学における箕子朝鮮説・檀君朝鮮説と泰伯論などの比較の有効性がのべられているが、それは「親中国的普遍性」とナ

ショナリズムの関連として妥当なものなのか、など色々と議論したい問題もある。そして、何よりも著者が「心の教説の時代」として近世を捉えていることについては、テクスト論としては、あまりに漠然としているのではないか、という印象も消し去りがたい。一方での開かれた知と他方での知の特権化という論点も、やや分かりにくい部分であった。

とはいっても、本書が「グローバリズム化されたナショナリズム」的言説が跋扈している時代に、それを「江戸」から考へ相対化するための書として刊行された意義は大きい。ナショナリズムを思想史学がどのように受け止めるべきなのかについても、本書から学ぶことが多い。その意味では、思想史学を方法的に開いていく書として読むことができるだろう。与えられた紙幅が限られており、あまりに要約しすぎたため、著者の意に添えなかつた点については、お詫び申し上げたい。(立命館大学教授)

前田勉著

## 『江戸後期の思想空間』

(ペリカン社・二〇〇九年)

松田 宏一郎

一九九六年刊行の『近世日本の儒学と兵学』(ペリカン社)から数えて、著者の四冊目の論文集である。質の高い論文を次々と公刊する著者のタフさには驚嘆するばかりであるが、それだけなく、新たな著作を出すたびにその前の著作で提起された問題意識が継承され、さらに深まっているという点に感銘を受ける。

本書『江戸後期の思想空間』は、前著『兵学と朱子学・蘭学・国学』(平凡社、二〇〇六年)で提示されていた、徳川の兵営国家体制から天皇制をその機軸とする国民国家への発展という大きな変動枠組みを前提としながら、近世後期の思想史にあらわれる思想家・思想作品を追跡する作業を継続している。前著で示されていた近世後期の「功名」の追求、ナショナルな「国益」の意識、天皇の権威への関心が高まることといった点については、前著よりもさらに幅広い思想家・思想作品の分析

によって、その思想的内実がより詳細に論じられる。特定の学派に対象を限定することなく、しかし丁寧に、儒学・蘭学・国学のいずれの学派にも起きていた思想的な変化を丹念に描き、諸学派に共通して現れる時代精神とでも呼ぶべき傾向を明確にしようとする点も、前著から継承したアプローチである。

しかしながら、本書の中でとりわけ重要な意味をもつのは、

第一編第一章「近世日本の公共空間」、同じく第二章「討論によるコミュニケーションの可能性」ほか、他の章においても個

別の思想家あるいは学派の分析の中で言及される「討論による公共空間の成立」とでも呼ぶべき事象への着目である。著者は、学問の場における「会読」が、討論を通じた真理の発見という方法を尊重する意識を近世日本社会にもたらしたことを見重視する。これが、「功名」の希求からナショナルなアイデンティティの意識までを結びつける知的な装置あるいは制度として機能したとするのである。これまでにも武士集団の意思決定システムにおける自由な討論の尊重については笠谷和比古などの指摘があり、また幕末儒学の中に討論を通じた政治的公共空間への志向が見られることは丸山直也も論じている。西洋の議会主義思想などの導入以前から日本には government by discussion を生み出しうる契機はあつたとする指摘は様々な研究対象に即して語られてきた。しかし著者はこの問題をより全体的な思想潮流として描こうとしている。そこで本書では、十八世紀の徂徠学の学問方法論がもたらした決定的なインパクトが蘭学および

国学にも広がり、十八世紀後期には多様な学問の場でテクストから真理を引き出す方法として重視されるようになり、さらにそれが幕末から明治初期における政治的討論の場に向かう知的な態度に大きな影響をもつたことが大きな流れとして叙述される。著者によつて提示される豊富なかつ興味深い引用の数々は、「会読」という方法論の普及が政治思想の大きな動きに果たした役割を示す説得的な根拠を提供している。

それでは、「会読」という方法がいかにして近世日本知識人のアイデンティティ形成と国民国家への同一化を促したのだろうか。本書では、概念中心というよりは、各思想家や学派に即した章立てがとられており、それだけ個別の思想家研究としても見るべき点が多いが、以下拙評では本書で重要な役割を果たしているキー・コンセプトの相互関係を整理することを通じて本書の主張点を明確にしてみたい。

## 二

第一に、「会読」の場が、名を挙げ後世に残したいという「功名」の追求にうつづけであつたといつてある。つまり討論による公共空間は、競争を通じて「自分」の社会的承認を要求できる場であった。学問集団における「会読」の場で競われる読解力や論争に打ち勝つ力は、社会における身分的優劣や経済的成功などとは別の、個人の知的能力を仲間集団に承認されることによつて確認されるものであり、公式の政治社会全体

制の中では十全に満たされない個人のアイデンティティの渴望を埋め合わせてくれる機会をそこに見出す者が現れた。

著者は多くの事例を引き、徂徠学、朱子学、蘭学、国学を問わず、「会読」の場で論争に勝ち自己の能力を認めさせたいとする欲求が共通に見られ、またそれぞれの集団においてそのための自由な討論を妨げてはならないとする規範意識が成立していたことを確認する。ここから、護園派が重視した「会読」の方法が、十八世紀中盤以降の知識人社会に学派を超えた広範囲かつ強いインパクトをもたらした理由と意味が読者にもよくわかる。もちろん、これは場合によつては、特にしばしば護園派についていわれたように、本来の目的が見失われた議論に勝つためだけの「セリ合ひ」をも生み出すこともあり、そいつた態度に対する宣長らの批判的コメントもある。しかし、著者はハーバーマスへの言及を絡めながら（アレントも意識されている気がするが、直接言及はない）、いわゆる「文芸的公共性」の成熟に「会読」が寄与したことを探る。つまり、閉ざされた学問集團の中とはいえ、そこにおける討論を通じた「功名」の追求は、社会経済生活での上下関係や利害関係とは切離された、メンバーや間の対等で自由な討論空間に参加し、またそこでの規範を尊重する態度を涵養した。藩校などで「会読」の経験があつた者は、江戸に出ても臆せず討論に加わり、頭角を現していった。幕末期に昌平黌の輪講会でその才を認められるものの中には、会読が盛んであつた会津や佐賀の遊学生が多くたた

いう（五〇頁）。さらに幕末にいたつては、「文芸的公共性」から「政治的公共性」への転換が起きた。討論空間から政治的争点への関心を排除することが困難になつていつたのである。古典解説のための方法として始まり、学問集団の場でおこなわれた討論は、幕末期の政治的危機に対応して政治的争点をめぐる討論へと変化し、さらには明治期の民権結社における勉強会にもこの方法は継承された。

第二に、著者は、十八世紀後半から幕末にかけてのこのようないくつかの「公共空間」の変容を、単に政治的討論空間の開かれた公共性に向けての発展としてのみ理解するわけではない。むしろ、著者はその中で起きた知識人のアイデンティティの渴望や苦しみといった問題に眼差しを注ぐ。それが宣長（第二編第一章および第二章の一部）、只野真葛（第二編第四章）、伴林光平（第一編第八章）、南里有隣（第二編第九章）などについて具体的に論じられる。たとえば本居宣長について、商品経済の発達の中で、「凡人」は、先祖伝来の家業を律儀に勤めてきたにもかかわらず、報われず、眞面目な者がなぜ幸福になれないのだという不条理感・憤懣を抱くこともある、そのやりきりなさを克服するための心理的な補償として「神代」以来の「皇國」の正しい生き方が理念として提示された、といった解釈がなされる（一七八頁）。つまり武士であれ商人であれ農民であれ各々の役を真面目にこなすことで結局は社会全体が安定し各人も幸福な人生が期待できるとする、家業を単位とする階層型の国家秩序が、

急速に競争的な市場に左右されるようになった社会の実態と合わなくななり、そこから生み出される不安や失望感が、「天皇の大御心」のままに生きる「神代」の人々の生活をいわば諸「商業」のユートピアのように描き出すことへと結びついたという。

宣長が過酷な市場社会では幸福になれない「弱者の共同体」を「天皇の大御心」に一体化することによる救済に結びつけたのと同様的心理的メカニズムは、女性であるが故にどんなに学問ができるでも「功名」の機会が奪われていると感じていた只野真葛にも見られる。只野真葛においては、社会に切り込んでいく機会があらかじめ奪われており、その点で不当に遇されているという感覚を「我国」「日本」「國の益」といったナショナルな価値によって乗り越えようとする志向が現れる。只野真葛は「稀有名な女性思想家」という点で重要なだけではなく、宣長が示した心性と、蘭学（只野真葛は『赤蝦夷風説考』の工藤平助の娘である）に現れる世界の中の「我国」というナショナリズム的意識への媒介を果たすものとしても、本書の中で重要な役割を果たしている。

また幕末の国学では、現世の社会的関係の中では自己の生の意味を十全に見出すことができないという不満から、神との直接的な一体感を急進的に表現しようとする欲求が見られた。天誅組の挙兵に加わった歌人伴林光平の場合には、「上代の人の眞情」を徹底的に「清らかに」歌で表現することによって自己の「名」を残したいとする意志が、急進的な政治的直接行動を生

み出した。佐賀の国学者南里有隣は、ウイリアム・マーティン『天道源原』を参考しつつ、神人関係は五倫のさらに上位にある「首倫」であるとして、日本の神を現世人間関係を超越した価値の源泉として再定義しようとした。

これらの事例はいずれも、競争を通じた「功名」という動機づけが人々の心情にもたらすアンビバレンントな効果にかかわっている。彼（彼女）等は、身分や商業的成功とは別の基準で評価され「名」を残したい。その限りでは歌や学問という世界において自由に論争し、その競争で勝ちたい。しかし、現実の社会経済生活における競争については不適合を起こしているか、もしくは不当な扱いを（努力しても報われない）を受けており、本来そのような競争を抑制すべきは公権力が提供する制度や公定道德への期待は裏切られている。そこで天皇や「日本」といった現実の世界では必ずしも未だ十分なリアリティをもたない価値を称揚し、それと一挙に同一化しようとする心理的機制を生み出すこととなる。

著者は既に『近世神道と国学』（ペリカン社、二〇〇二年）および前著『兵学と朱子学・蘭学・国学』の中で、天皇の権威の浮上を支える知識人の心理について様々な角度から考察を加えてきたが、前著でやや簡単に述べられていて十八世紀の市場社会の発展をその契機として重視する度合いが本書では強まつた。資本主義の発展により流動化した社会での不安がアイデンティティの渴望を生み、超越的な権威への服従欲求を生み出すこと

もあるという心理的メカニズムの指摘は、典型的にはフロムほかフランクフルト学派の古い世代が提起していたものであり、少なくとも初期のハーバーマスにもその影響は濃い。著者がそういった分析枠組みに共感を示している点は、率直に言つてもう少し批判的な吟味を経て欲しい感じがする。しかし、個々の思想家についての説明そのものは十分に説得力をもつており、天皇の権威の上昇と、具体的な社会関係を超えた日本という国家を価値あるものと見なしたいという欲求とは、大筋では本書で描かれているように展開していくのであろう。

第三に、上記と同様の社会変動を眼前にしながら、自己の能力を信じ積極的に勝ち残っていくこととする態度からナショナリズムに近づいていくもう一つの系譜が見出される。これもまた「会説」で得られる「功名」の実感が基礎となり、その視野が学問集団を超えて広く国家の在り方にまで拡大していくもう一つのプロセスである。そこでは、討論による公共空間の有効性を認め、それを尊重する意識が、いかにして国民国家形成へと収斂していくのかという問題が見出される。

著者は、山片蟠桃の「我日本」という意識に、宣長とは対照的に、厳しい市場での競争に物怖じしない「逞しい自我」を見出し、司馬江漢・本多利明たちが「日本に生を裏たる身」として異国との交易を通じて利益追求と「功名」追求をおこなえばそれは日本の「國益」にもなるという確信をもつたことに着目する。また渡辺華山については画業という「一芸」による「功名」の希求が、「志」を遂げさせることを尊重する西洋の学校制度とそれを基礎とする国力への高い評価を生んだこと、佐久間象山についても優れた人間がその「才力」を十分に發揮することが「國力」の隆盛をもたらすという思考の道筋がとられていたことが確認される。これらの事例は、いわば学問や「芸」の世界で承認されることによつて得られる充実感が、国際社会における国家レベルの充実感の追求へとつながつていった事例

されたことが示される。そこでは、ある政治体制が道徳的に正しいか否かといった評価は相対化され、生き残りに十分なほど強いか、賢いかが優先的な課題とされる。その上で、特に山片蟠桃（第二編第二章）、司馬江漢、本多利明（第二編第三章）、渡辺華山（第二編第五章）、佐久間象山（第二編第六章）といった個別的思想家の分析において、自国の価値が世界秩序から見ると相対化されればされるほど、ナショナルなものへのコミットメント（その国に生まれた以上は自分の国といった考え方）が強まり、プライドと危機意識が相乗的に高揚するプロセスが具体的に明確になる。

著者は、山片蟠桃の「我日本」という意識に、宣長とは対照的に、厳しい市場での競争に物怖じしない「逞しい自我」を見出し、司馬江漢・本多利明たちが「日本に生を裏たる身」として異国との交易を通じて利益追求と「功名」追求をおこなえばそれは日本の「國益」にもなるという確信をもつたことに着目する。また渡辺華山については画業という「一芸」による「功名」の希求が、「志」を遂げさせることを尊重する西洋の学校制度とそれを基礎とする国力への高い評価を生んだこと、佐久間象山についても優れた人間がその「才力」を十分に發揮することが「國力」の隆盛をもたらすという思考の道筋がとられていたことが確認される。これらの事例は、いわば学問や「芸」の世界で承認されることによつて得られる充実感が、国際社会における国家レベルの充実感の追求へとつながつていった事例

である。

これらの思想家は、現体制のもとでは個人の「功名」の実現が難しいばかりか、国際社会の競争の中でその体制そのものが生き残つていけないという危機感をもつてゐる。その点では国学者とも通じる部分がある。しかし、挫折や敗北のやりきなさの補償を「神代」や「天皇の大御心」に求めるのではなく、タフに合理的に自己を鍛え上げ、競争の中で勝つていこう、しかもそれは道徳的な努力である、という確信がそこにはある。この思想の系譜は乱暴にいえば、「会読」経験による「討論する公共性」の意識が、いわば「公共的価値の獲得競争」への志向を涵養し、さらにそれが国際社会観に適用されてナショナリズムを形成していった回路を示すものである。

### 三

著者は、「討論する公共空間」の形成からナショナリズムへと至る、二つの対抗する、しかし絡み合つてゐる回路を以上のようく描き出した。さらにそれだけではなく、著者はある種の価値的なコミニットメントをその分析の中に持ち込んでいる。そのことがよくわかるのは、「水戸学の『国体論』」(第一編第七章)と「津田真道の初期思想」(第二編第一〇章)の二つの章である。

まず後期水戸学、特に会沢正志斎について、その「国体」論が、「律儀なもの」の苦しみを憂い、西洋社会を「利」を争う

「禽獸」の社会として軽蔑することに動機づけられている点で国学と通じるものであることが指摘される。しかし、国学における「神代」の理想化と会沢らの「国体」論とは大きな違いがある。すなわち水戸学の「国体」論とは、天皇の国家祭祀を用いて、真情からというよりは作為的な意図をもつて民衆を巻き込み、血統を根拠にする階層秩序を再建することが日本の「国体」本来の姿に戻ることであると信じ込ませ、その秩序に対する受動的服従ではなく能動的参加を促す政治的な装置として機能することを期待する思想である。著者はこのような分析の後に、「近代日本の歪みから生まれる矛盾にたいするひとつ」の対応の型を提出した点で、水戸学の「国体」論は歴史的な意義を有している」(三六四頁)と述べてゐる。ここで著者が述べていることが、資本主義がもたらす過酷な現実に耐えるよりも「国体」を信じて共同性を自発的に担おうとする方があ 幸福だと述べたいわけではないことを評者は期待したいが、そう解釈される余地のある一言である。

また、津田真道について、その西洋留学前の思想が、「功名」への焦りと、具体的な社会関係を超える価値として理想化された天皇への忠誠心など、幕末期の精神状態の典型例を示すものであることが明らかにされ、それが明治期の「啓蒙」的知識人としての活動においては、国民国家確立への献身という具体的で現実的な志向へと変容したことが指摘される。著者はここで、津田が宗教的信仰の精神的価値にあまり関心も理解も示さ

なくなつた点を批判的にとらえ、「こうした宗教への鈍感さは、国家からの自立を困難にしているのではないか」と述べている。茫漠とした大宇宙の中で卑小な人間が「名」を残すことの意味を考えていた幕末の津田よりも、明治国家の独立と隆盛に科学的知識を通じて献身しようとする後の津田の方が「自立」していないというのである。

以上の著者の記す評価から、個人が競争の激しくなつた世界に立ち向かい勝ち残ろうとする思想は結局国民国家間の苛烈なサバイバルレースの論理に絡みとられるであろうという見通しが暗示されており、そしてそれに対抗する敗者の心情に共感する思想は、近代国民国家の論理の前に不当に排除・抑圧されてきたという見方がまた暗示されている。

「会誌」を出発点とする「功名」への志向が一見同じよう、「皇國」や「我国」といったナショナルな価値へ収斂していくように見えながら、実は対照的とも言える思考態度の対立を内包していたという大きな思想史的ドラマは、本書が十分に興味深く描いたものであった。しかし残念ながら、著者が控えめながら吐露する、本音ではどちらの系譜に身を寄せたいかという告白は、著者自身がおこなつてきた手間のかかる考察を裏切るものであるように思われる。近代国家は人々を競争によって動機づけるだけでなく、敗北を慰めてくれる理想や幻想をも提供する。優れた思想家は自分の思考を見つめる態度が誠実であればあるほど落ち着き先を見つけるのに苦しむものであろう。本

書に取り上げられた思想家達が、著者が考えるよう近代への助走を始めていたとするならば、競争の成果と高揚感を享受する自己と、敗北の恐怖におびえる自己とを両方抱え込み、なつかつそのことを意識する自己が成立したはずである。もしそれほど複雑な思考の手がかりがテクストに見出せないとすれば、その思想家はその程度のものでしかなかつたということである。かりに本書の狙いに即して思想家の評価づけをする必要があるとすれば、そこにこそ踏み込むべきではないだろうか。資本主義と国民国家の論理に対抗できる思想の契機があつたかどうかという問題設定は、論点が錯綜し断片化してしまつて思想家に対しては、その思想像のとりまとめに役立つかかもしれないが、優れた知性による思考の軌跡そのものを知りたい読者にとっては、焦点がずれていると思われることもある。とはいえ、本書の豊富な引用と目配り、そして著者の丁寧なテクストに対する真摯な読解は、狭い問題設定を実際には大きくはみ出し、さまざまなアイデアの可能性を提示している。著者はそれを無理にコントロールしようとしなかつた。おそらく歴史家としての職人的な勘がそうさせたのだろう。その鋭さをこそ評価したい。